

# 寺報 佛心

第53号

日輪山 長久寺

【発行所】

岩国市美和町生見八一七  
電話 〇八二七（九六）〇九八二  
FAX 〇八二七（九六）〇九八二  
発行人 三上宗順

## 除夜の会のご案内

良いことも悪いことも

いろいろあつて

泣いて笑つて…

いつの間にか暮れる令和5年。

さて、来る令和6年はどんな年になるのやら…

来年も… 来年こそ…

あなたの幸運を切り開く

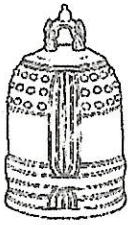
大きな一撞を！

来る十二月三十一日午後十

一時十五分ごろスタートし、

翌一月一日の〇時三〇分ごろ

までの予定です。



昨年同様に感染対策の一環

で、会場での飲食のお接待は

行いませんが、缶入りの暖か

い飲み物を用意しております。

また干支の土鈴など粗品も用

意しています。

本堂にお参りされ、飲み物

等を受け取られた方は、順次

鐘撞堂へお廻りください。

ご家族ご近所お誘いあわせ

の上お参りください。

へお焚き上げ

信心から求めたものは、感

謝の気持ちで返納しましょう。

除夜にお焚き上げを行います

す。前日までに、返納したい

仏具やお札、お守りなどご持

参ください。

幸せになる方法 その7

前回幸せになる決定的な方

法はありませんと書きました

が、実はあるのです。と断言

する私には未踏の世界なので

すが、しかし「ある」と思え

ば「心」も安らぐはずです。

「心」には、二つの面があ

るといいます。人間の煩惱の

まま喜怒哀楽に執着し揺れる

心を「人心」といい、しかも

凡夫の私たちはこの「人心」

を本当の心だと思っている。

しかし「心」には、もともと

「仏心」という面があつて、

この「仏心」は人間だけでなく

く動植物魚類昆虫すべての生

き物がそなえている本当の

「心」だということです。

そう言われてもどこにある

のか見えもしないし、つま

えようがないのが「心」です。

だから「心」とはそういう

もの。「仏心」＝「本当の心」

が自分にもそなわっている

と信じるほかはありません。生

ぜず滅せず汚れもせず清くも

なく増えもせず減りもしない

「本当の心」があると確信し

たならば、煩惱のままの喜怒哀

楽は、執着を離れさらりと

流れて行くことでしよう。幸

せがやってくれば喜び、去つ

ていけば残念だけど、それ以

上の欲望や失望という「心」

は動かず、執着も後悔もない

ということですね。まあ下手

な小理屈より、次の一句を。

アハハハハ それで万事を

すます母(読人不知)

これこそ幸せになる決定的

な方法ですね。

## 渋即甘のはなし

台風のないおかげで田んぼは乾き害虫も少なく稲刈りがスムーズでした。しかし夏の日照時間が長すぎお米は美味しくないそうです。粟はなかなか落ちず、しかもイガのまま落ち虫栗が多かったです。柿は熊の出没で早々に摘果です。当然食べきれず、もったいないので不味くても事情を言って何人かに引き取ってもらいました。境内の紅葉は異常気象に戸惑っているのか、さえませんでした。そんなこんなもみんな大自然のすることですから受け入れるしかありません。しよーぼいあーきーみーつけたー、でした。

ところで熊の餌になりそうだった柿。もともと柿の渋みの正体はタンニンで、甘柿も幼果の頃は渋味があり、実が色づき熟してくるとタンニン

の性質が水に溶ける性質から解けない性質にかわるため渋味を感じなくなるそうです。

柿のタンニンはポリフェノールの一種で美容と健康に良いとされています。ビタミンCもみかんの2倍とか、殺菌作用もありインフルの予防にも効果的。また低カロリーはダイエット向きだし、抗酸化作用がありアンチエイジングに有効らしいです。柿が赤くなると医者が高くなると言われる所以ですね。

青い時は種が完全ではなく柿は「まだ食べないで」と、そしてアカく熟すと「甘いよ食べて」と言っている。自然はちゃんと会話しながら持ちつ持たれつなんですね。

日本人はつるし柿を考案しました。つるし柿が歴史に登場するのは平安時代の中期とありますから1000年前。

渋柿を食べやすいように改良した先人の知恵に感謝です。

皮をむくと渋柿は嫌がつて被膜を作り、アセトアルデヒドという物質化が出てタンニンが結合し不溶性になり甘くなるのだそうです。柔らかく甘いドライフルーツですね。

子供の頃にはどこの家にも日当たりのよい軒先に吊るし柿がありました。乾燥した寒風にさらされて縮こまり黒くなつた柿をほおぼると歯ごたえがあり、噛めば蜜のように甘くなる。この味と食感の子供の頃に帰れます。

作者は知りませんが「渋柿の渋がそのまま甘味かな」という句が有ります。

甘柿は干し柿にすると腐ってしまいうそうです。ひと噛みすると吐き出してしまうほどの渋味が有つてこそ、皮をむかれ寒風にさらされると甘柿

よりも甘くなる。

ところで人間の煩惱がこの柿の渋に例えられます。煩惱あつてこそ人間。そもそも人間の「苦」の原因は、この煩惱。あれが欲しい、あいつが可愛い憎い、損だ得だと欲望を募らせ、思い通りにならなければ腹を立てる愚かなる人間。またこの煩惱をなくしようと苦しむのも人間。これが人間の苦味ですね。

しかしこの煩惱とうまく付き合いコントロール出来るようになる、煩惱という苦味が智慧や慈悲という甘味に変わってくるというわけです。

禅では「煩惱即菩提」と言います。煩惱あつてこそその悟りだと。渋即甘、ですね。

天辺で木枯らしに晒される木守柿一つ。餌のない冬に鳥達のために残しておく…

先人の心にほっこりです。